臨界点が来る前に転換できるか

PHP総合研究所国家経営研究部長 永久寿夫

情熱を直接受けとめた第一世代

松下政経塾出身の都県議会議員は現在十五名。前回、秋季号では主に非自民の議員を紹介したが、今回は自民党に属する八名の議員を紹介する。政経塾入塾順で並べると以下のとおりである。

内山　登　一期生・岡山県議（和気郡・二期）
平　浩介　一期生・広島県議（　品郡・五期）
打越明司　二期生・鹿児島県議（指宿市・三期）
田辺信宏　六期生・静岡県議（静岡市・二期）
小田圭一　七期生・岡山県議（倉敷市・二期）
谷田川元　七期生・千葉県議（佐原市・三期）
村井嘉浩　十三期生・宮城県議（仙台市宮城野区・二期）
渡辺猛之　十三期生・岐阜県議（加茂郡・二期）

この八名で興味深いのは、偶然にも入塾期が一桁前半、一桁後半、二桁と三つの「世代」で分けられることだ。第一世代の内山、平、打越は、塾長松下幸之助から直接教えを受けた数少ない「幸運」な塾生たちである。第二世代の田辺、小田、谷田川は松下から直接薫陶を受ける機会はあったものの、わずかな時間しか接することができなかった。第三世代の村井と渡辺は、松下没後の入塾で、松下と直接触れることはできず、間接的に松下から学んだ塾生たちである。こうした世代によって、何か特徴があらわれるのだろうか。そのあたりからみてみよう。

政経塾設立当初、政経塾を訪れ塾内に宿泊する松下を、一期生は二人一組で世話をすることになっていた。内山はそれを昨日のことのように話す。「講義が終わり、部屋に戻られる塾長について行って、靴を脱がし、洋服をかけて、食事のお世話をして、風呂に入って背中を流すんです。浴衣の帯の締め具合やお茶の温度なんかも教えてもらいました。ある晩十時くらいに、突然『ヤクルト飲みたいな』って言い出したんです。当時はコンビニなんてありません。必死になって、なんとか手に入れました。そして最後に、今日の世話は何点と点数をつけられました」「当時、松下電工のシェーバー事業部が赤字だったらしいんです。それで深夜に事業本部長に電話して『今日、シェーバー何個売れたんや』て聞くんです。業界紙には全部目を通すし、各事業本部長のスピーチなんかもテープで聞くんです」「塾長は八十六歳でしたけど、夜二時くらいまでは、そうした仕事をしたり、私たちと話をして過ごし、朝五時にはもう起きていました」

「こんなエピソードもありました。松下のコンプレッサー事業部で研修をさせてもらいましたが、その報告をした時に『収益状態はどうだ』と聞くんです。『わかりません』と答えると、烈火のごとく叱られました。『ラインでコンプレッサーつくっていても、一日どれくらいの数が生産されて、かっているかどうかはわかるはずだ。それが全員経営だ。もっと、高いレベルで勉強して来い』ということでした」「その老いた小さな身体に秘められている政治や事業にかける情熱は、並大抵のレベルではありません。その情熱にじかに接して、私の人生も変りました」と内山は話を締めくくる。

内山　登（うちやま・のぼる）
1955年、岡山県和気郡佐伯町生まれ。慶應義塾大学法学部法律学科卒。80年、自分の可能性を試したいと政経塾に入塾。松下の「国土創成論」の実現を目指し、卒塾後９年間建設会社に勤務。その後、地元にもどり、95年岡山県議に初当選。現在２期目。「塾長の思いや理念を世に啓発し、平和・幸福・繁栄の社会を実現することがもっとも大事なことである。政治を良くしていくことは、そのための一つの手段」と語る。

同じ一期生の平の印象に強く残っているのは入塾式である。「体調が非常に悪かったそうで、話をされていることがよく聞こえないんです。正直いって半分くらいしかわからなかったんですが、気魄と情熱が伝わってきて、生意気だと思うんですけど、この方が政経塾をつくって、なし遂げたいと考えていることを、私もその実現にがんばりたいと思ったんです。あとでうかがえば、ずっと風邪をひいておられて、ドクターストップがかかっていたらしいのですが、入塾式だけは何としてでも出るということで、無理をおしていらっしゃったようです」

さらに、「自分も含めて海外経験のある連中が何人かいて、若いうちに海外に出て外国の人たちとの意見交換をする必要があるとお話ししました。すると『それは一理あるし、部分的には自分も賛成や。しかし、まず日本のことをちゃんと勉強せなあかん。安易に海外に行っても、自主性・主体性をしっかり持っていないと、外国のことも正しく理解でけへん』といわれました。少し不満でしたが、あとになって、自分も日本のことがわかっているようで実はわかっていなかった、と感じるようになりました。『知識』を生かす『知恵』を身につけろ、肝心なことは身体で悟るしかない、と教えを受けましたが、いまだに言葉の上での理解しかできていないような気がして汗顔の至りです」

二期生の打越もまた、松下とのエピソードを懐かしむように話す。「誰かが、次のような報告をしたんです。『選挙の現実は大変ですよ。どの候補者も何でもありで闘うなかで、いくら高邁な理想や高潔な姿勢をもっても票にはつながりません』と。そのとき、私の知るかぎり、一番怒った。『なに言うとるのや、君は！』と机を叩いて、『泥棒が泥棒に対してあいつが悪いといっても誰も聴く耳をもたん。俺は十円しかとっていないが、あいつは百億円とったと。だからあいつは悪いといっても、誰も聴かんのや。人生八十年経て、なおこの結論や。

平　浩介（たいら・こうすけ）
1954年、広島県芦品郡新市町生まれ。早稲田大学政治経済学部経済学科卒業後、ミシガン州立大学で経営学修士（ＭＢＡ）を取得。80年政経塾に入塾。政経塾では主に行財政改革・南北問題について研究。その後、３年間、宮澤喜一の秘書を務め、86年広島県議初当選。現在５期目。「まちがった横並び主義で、がんばるという気持ちが失われつつある。努力することの大切さを培う公教育が求められている」と教育問題に強い関心をもつ。

僕が若い君らを集めて日本を変えようとしたのは、それをわかってほしかったからや。そんなこと、まだわかってへんのか』。これは私の政治家としての鑑となっています」

「こんなこともありました。選挙のパンフレットをお見せしたんです。そしたら『ええのつくったやないか。これ君なんぼしたんや』と聞かれ、『一部二十円くらいです』と答えると、『ぐらいやいかんじゃないか』といわれ、そこで、『十六円五十銭です』と答えたら、『それでええんや』というんです。そして『君どんなふうに使っとんのや』と聞かれて、『各家庭に配布して読んでもらっています』と答えたんです。そうすると『そんだけか。君、それ十六円五十銭分あるんか』と追及するんですよ。『君、もう少し安くつくって、もうちょっと価値のある使い方ができへんのか。帰ってみんなと相談せぇ』といわれ、さすがに商売人だなと感じました。叱られてばかりでしたけれど、愛情をいっぱい注いでもらったなと感じています」

徹底的に聴く姿勢

六期生の田辺が松下と会ったのは五年間で三回である。そのなかで特に印象的だったのは、同期の誰かが「塾長は名誉もあるし、おカネもあるし、何もかも手に入れた。成功の秘訣を教えていただけないか」といった質問をした時である。「塾長は『昔話はつまらん。これからが大事や』といったんです。『わしはいま九十歳やけど、マラソンでいうとまだ折り返し地点や。これからの日本はどうなるのかを考えると、これからの九十年のほうが面白いと思う。日本はどうなるのか教えてくれへんか』といわれました。想い出話をしない、前向きな人なんだなと思いました」。また、松下の言葉で田辺が大切にしているのは「鳴かずんばそれもまたよしホトトギス」という句である。「信長、秀吉、家康は三人とも、ホトトギスが鳴くのを前提にしているわけですが、鳴かないホトトギスも世の中にはいます。それを認めていけば、次の展開も自由に考えられるという発想です。これだけなら、私も真似できるかもしれないと思いながら、特に失敗した時に『これもまたよしだ』と発想の転換をしています」

七期生の小田が松下と会ったのは、松下記念病院に松下を訪問した時の一回で、しかも「塾内の活動を報告して、それに対して多少お答えがあった」という程度の時間であった。その時の印象として残っているのは次のようなことだ。「政経塾では早朝の掃除とか基本的なことを非常に重視するんですが、なかなか全員が心を合わせてやれない。そこで、塾長からも注意してもらえないだろうか、とお願いしたんです。そうしたら、『十年たって何やっとるんや』と叱られました」「私自身が、政経塾ＯＢの活躍ぶりをどう思われますかと質問をしたら、『何やっとるのかようわからん』と厳しい口調でいわれ、クシュンとして帰ってきました」「塾長は日本をよくするために、塾生に対して、既存の政治の枠にとらわれない、大胆な活躍を期待されていたのだと思うのですが、活躍はおろか、もっとも基本的な仕事もできていないので、大変がっかりされたのだと思います。それ以降、私たちも初心にかえり、奮起しました」

谷田川は小田と同期で、同じときに松下と一回だけ会っている。「私がすごく印象深かったのは、塾生が一人二、三分くらい報告をするんですが、塾長が一人ひとりの話をまったく遮らなかったことです。聴き上手ということはうかがっていたんですが、本当に耳を立てて聴くんです。サウジアラビアのファイサル国王が『神様は我々に二つの耳と一つの口をあたえた。だから自分が話す二倍を聴かなくてはならない』といっていますが、まさにこのことだと思いました」「九十歳にもなれば、聴くということは体力的にもしんどいし、しかもあれだけの成功者ですから、二十歳そこそこの連中の話なんて、聴いていられないはずです。むしろ話したいことのほうが多いはずです。塾長に会えたことに感動し、また緊張もしていたので、私が何をお話しして、塾長がどうお答えになったか残念ながら覚えていないんですが、その聴く姿勢があまりに印象的で、それ以降、私もまず人の話を二倍は聴くことにしています」

世代による微妙な違い

村井と渡辺は、松下没後入塾の同じ十三期生で、当然のことながら、松下と直接会ったことはないが、語り継がれたエピソードや残された文章を通じて、松下からさまざまなことを学んでいる。

村井は「父が大阪で商売をしていて、塾主（没後松下は塾主と呼ばれるようになった）の講演に行ったり、テープを聴いていました。そして、よく『松下さんはすごい』なんて聞かされ、政経塾に入る前からずいぶん影響を受けています。しかし、政経塾で学んでから、腹にストンと入ったことがたくさんあります。たとえば、『素直』ということですが、普通は何かをいわれたら、自分がどういうふうに思っていても『わかりました』ということですが、そうではなくて、どんなことでもいったんは受け入れて、自分なりに咀嚼して、そのなかから本当のことを考えていくことだとわかりました。また、『衆知を集める』ということも、最初はいろんな人の知恵を集め、たし合わせていくことぐらいにとらえていましたが、そうではなく、自分なりに徹底的に考え抜き、さらにさまざまな人の意見を幅広く聴いて、その上で最終的な判断をすることだとわかりました。政治活動のなかでも、それが私の基本姿勢となっています。私利私欲ではなく、世の中に役立つことは何だろうと、『素直』な気持ちでさまざまな考え方を受け入れ、さら

打越明司（うちこし・あかし）
1958年、鹿児島県指宿市生まれ。九州大学経済学部経営学科卒。周囲の薦めもあって、政治家を志し、81年政経塾の門を叩く。87年、鹿児島県議に初挑戦するも、落選。その後、選挙区一軒一軒をくまなく回り、有権者の家から食事をいただいたり、泊めてもらったりという、「托鉢型」ローラー戦略で、91年当選。現在３期目。「リストラの請負人という、辛い役回りを、責任をもって果たすこと」が現在の政治家に求められていると考える。

田辺信宏（たなべ・のぶひろ）
1961年、静岡県静岡市生まれ。早稲田大学政治経済学部政治学科卒。学生時代には、国際学生会議など国際交流のプロデュースを行うとともに、雄弁会でも活躍。政経塾の説明会に来た塾生の活動に心を打たれ、85年政経塾に入塾。英国・サセックス大学大学院で国際関係を修了。卒塾後の91年、静岡市議に立候補し、当選。95年、静岡県議に当選、現在２期目。英国での経験を生かし、「世界的な視野で、明日の静岡を考える」国際派。

小田圭一（おだ・けいいち）
1960年、岡山県総社市生まれ。早稲田大学社会科学部卒。子どものころから政治家に興味をもち、学生時代には雄弁会に所属し、選挙の手伝いなどを行う。卒業後は、社会を広く勉強しようと新聞記者になるが、政治家を目指して、88年政経塾に政治専科生として入塾。倉敷にて地域の活性化、特に商工業問題を調査する。95年、岡山県議に立候補し、当選。現在２期目。「今の日本に必要なのは、家族の絆の回復である」と力説する。

に徹底的に考え抜くことにしています」

渡辺は、間接的な話を通じて、松下の政経塾にかけた熱意を強く感じたという。「塾主が亡くなられたあとですから、それぞれ勝手に松下幸之助像というものを作り上げてしまうんです。そんななかで次のような話をしたことがあります。『一代であれほどの財を築いた塾主にとっては、政経塾設立に使った七十億円というのは大した額ではなかったのではないか。ひょっとしたら、節税対策じゃなかったのか』と。すると、当時塾頭だった上甲さんから、『じゃあ、渡辺君がいま政治に対して、一万円出せるか。しかも現在活躍しているバリバリの政治家に出すんじゃない。塾主は、どこの馬の骨ともわからぬような若僧に、七十億円を出してまでも、この国の政治を良くしようとしたんや』といわれ、あらためてその熱意というものを感じた次第です。その熱意のすごさを、政治家となったいま、さらに強く感じます」

このように八名それぞれが松下から学んだことを人生のあるいは政治家としてのより所としている。ただ、文章ではよくわからないかもしれないが、彼らに直接会うと、三つの世代で微妙に違いがあることに気づく。第一世代は、文字どおり松下と肌と肌との交わりをもち、そのなかで本当に涙を流すほど叱られた経験をもっている。また、叱ることが松下の政治や事業に対する情熱であり、塾生たちへの期待と愛情であることも肌で感じている。だからこそ、話がより具体的であり、取材する側にも強く伝わってくる。第二世代になると、松下から直接叱られてはいるが、第一世代とは松下との接触の仕方に距離があり、また接する時間が短かった分だけ、心に刻まれたものも少なかったという印象がある。第三世代になると、松下の影響はやはり間接的で、教科書で習ったという感じが否めない。叱られてこそ一人前といわれるが、叱られるチャンスが多かった世代ほど幸せといえる。

こうした世代の違いによる差は仕方のないことだし、また世代によって志が高いとか低いということにはならないだろう。しかしながら、政経塾が直面している一つの課題がここにあるといってもよい。すなわち、政経塾を創設した松下の「想い」が、これからさらに世代を重ねるにつれ、単なる「看板」になってはいかないかという危惧（きぐ）である。たとえば、福沢諭吉の「独立自尊」という精神が、現在の慶應の学生にどのようなかたちで継承されているかわからないが、建学当時の学生が引き継いだものとは変わっているにちがいない。しかも、逆説的ではあるが、さまざまな分野で逸材を輩出すればするほど、学校はキャリアパスの一つになってしまい、その特性を失ってしまう。

政経塾も政治の分野に限らず、優秀な人材を輩出しつつある。その先輩たちの活躍ぶりをみて、政経塾の門を叩くものも少なくない。それはそれで一つの成功ではあるが、それによって政経塾が政治家や経営者を育てる単なる学校となってはいけないはずである。すなわち、松下がなぜ政経塾をつくり、どのような人材を世に出したかったのかが正しく理解され、継承されないかぎり、政経塾は政経塾としての存在理由を喪失してしまう。幸いにも、いまのところは、政経塾はもとより松下電器などで松下から直接薫陶を受けた第一世代の指導によって、松下の「想い」が引き継がれているようだが、その状態がいつまで続くかわからない。であるならば、慶應義塾の小泉信三のように、政経塾にも「中興の祖」的な人材が求められてくるのではないだろうか。

地方から政治を変えよ！

さて、ここで紹介した政治家たちはみな、自民党所属の県議会議員である。彼らがなぜ自民党に属するようになり、また県議になったかは一様ではない。「自民党にあらずんば人にあらず」といった保守王国で活躍するには自民党以外にはありえないという場合もあるし、たまたま自民党と人的なつながりがあったという場合もある。また、県議になった理由も、それが自分の活動のフィールドとして適当であると判断した場合もあれば、選挙に出ようと決心した時に、県議のチャンスが偶然巡ってきたという場合もある。あるいは国政への足がかりという場合もあるだろう。きっかけや将来的な展望はどうであれ、彼らは松下から受け継いだ「想い」を、それぞれのやり方で実現しようと努力している点では変りはない。

そうした彼らに期待すべきことは二つある。その第一は、地方から政治を変える仕事である。例えば、公共事業＝無駄と判断されがちだが、社会資本整備が遅れている地域にとって、公共事業はやはり必要である。問題は、必要なものをいかに効率的に整備するかである。渡辺は次のように語る。「私の選挙区には上水道がないところもあるんですが、それほど必要でもないんです。むしろもっと必要なものがある。にもかかわらず、国も県もそこに上水道をつくろうとするんです。現場のニーズを正しく把握すれば無駄は発生しません」。こうしたやり方を徹底すれば、公共事業の生産性は高まっていくだろう。

一方、地域全体としては不要だが、特定の人たちには利益になるという事業が少なからずある。これに対しては有権者にその非を訴え、啓発していかなくてはならない。しかし、これは悪くすれば票を失うことになり、勇気のいることである。田辺は「虫の目と鳥の目」をもつ必要があるという。「まず、どんなに小さなことでも有権者の話を聴き、そのために働くということが大切です。これが虫の目です。そのあとに、鳥の目で全体を考えて話をするんです。そうすることで、こちらの真意がわかってもらえるんです」。有権者を啓発することは大事だが、血の通わないやり方では、反発を招くだけである。田辺のいうような地道なやり方がなければ、地域の政治は変っていかない。

平は「豊かになった結果なのかもしれませんが、将来何かをするためにがんばるといった気持ちが、子どもからだんだんなくなってきていると思うんです。だれしも今を楽しみたい、安易な道に行きたいと思うものですが、みんながそうなれば日本は没落していきます。ですから、教育をなんとかしていかなければならない」と努力している。小田は子どもがそうなる原因の一つとして、家庭の問題をあげる。「父親は単身赴任したり、夜遅くまで仕事で帰らない。一方、母親も外に出たり、遊んでいる。子どもはかぎっ子で一人でカップラーメンを食べている。家族が一家団欒（だんらん）で笑いあって、食卓を囲める社会が本当の幸せであって、そうした社会をつくることが必要なんです」と。

谷田川元（やたがわ・はじめ）
1963年、千葉県佐原市生まれ。故・山村新治郎代議士を従兄弟にもち、また父親がその秘書を務めていたこともあり、子どものころから政治に関心をもつと同時に、不正がまかりとおる政治のあり方に憤りを覚える。早稲田大学政治経済学部政治学科に入学、雄弁会に所属する。卒業後、商社勤務を経て、88年、政経塾に政治専科生として入塾。米国下院議員のスタッフとなり、米国の議会政治を学ぶ。93年、千葉県議に当選。現在、３期目。

村井嘉浩（むらい・よしひろ）
1960年、大阪府豊中市生まれ。防衛大学校機械工学科卒業、陸上自衛隊幹部候補学校を経て、ヘリコプター・パイロットとなる。国防問題が政争の道具となっていることに憤り、政治家を志して、92年政経塾に入塾。95年、自衛官時代に住んだ宮城県の県議に立候補、当選。現在２期目。「空から見ると、21世紀の日本は北のほうへ発展していくのが直感的にわかる。宮城にはその中心となる可能性がある」と展望する。

教育や家庭の問題は、国よりも地域に密着した政治が取り組んでいくべきことであり、彼らの活動に期待がかかる。村井は自衛官出身という独特の観点から、危機管理がしっかりできる社会を築きたいと考えているが、村井自身がいうように、災害対策や病院の院内感染対策をはじめ、地域レベルで行えることがたくさんある。彼らの努力がさまざまなかたちで実を結ぶことを期待したい。

ビジョンを描き自民党改革を

期待すべきもう一つの仕事は、自民党を内側から改革することだ。まず、日本をどのような国にしていくかというマクロなビジョンをつくり、それを国民に提示することである。これは国政の仕事ともいえるが、ビジョンがなければ地方の仕事もできない。谷田川は「地元では地方分権についてはピンと来ない人のほうが多いんです。なぜなら、分権の目的は、いかに住民が満足する行政を行えるようにするかというところにあるはずなのに、分権自体が目的化されているからです」という。また、内山も「ビジョンがないのに、地方分権がいいのか、中央集権がいいのか、わかるはずがない。国家ビジョンがどうあるべきかを議論して、それを前提にして地方分権が望ましいのなら、それを進めるということでなければ」と語る。そのとおり、分権は目的の手段でしかない。しかし、残念なのは、なんといっても政治の中心にある自民党自体がビジョンをもっていないことである。たしかに、政府・自民党はＥ－ＪａｐａｎといったＩＴを機軸とする国造りを目指し始めたが、それがビジョンといえるかどうかは疑問である。ＩＴも所（しょせん）は何かの手段でしかないからだ。

渡辺猛之（わたなべ・たけゆき）
1968年、岐阜県加茂郡八百津町生まれ。名古屋大学経済学部卒。92年、大勢の人に会い、役に立てる仕事は何かと、政治家を志し、政経塾に入塾。塾生時代には、河川の研究を行う。95年、地元で県議立候補の要請があり、立候補、当選。現在２期目。「公共事業が不要か必要かは、現場で判断すべきである。それがなされていないから、大きな無駄が生じる。中央集権的な国のあり方が問題」と考える。

問題はなぜ、ビジョンが描けないかということである。それには自民党の構造に問題があるのではないか。すなわち、一九五五年の結党から築かれた年功序列の「日本型組織」が、党内に存在する革新的パワーを阻害しているのではないかということだ。これまで、日本にはビジョンとよべるものがなかったわけではない。それは敗戦で荒廃した社会から欧米に追いつけ追い越せと復興し、経済大国になることだったかもしれない。しかし、それが現実のものとなったいま、それに基づいてつくられた組織や制度が、自民党の活動を硬直化させているのではないか。だとすれば、新しいビジョンを作り上げるためには、現在の自民党の構造を、中央地方を問わず、改革していく必要があろう。

内山は「このままの状態では日本は危機的な状態に陥るでしょう。でも、それまではみな危機を危機と感じない。最後の臨界点まで達しなければ、この国を変えようという力は出てこないでしょう。しかしそれではいけない。その前に何とかしなければならないのです」という。アメリカの政治学者ロバート・ダールは「民主政治はつまらぬことしか決めない」といっている。実際、時代の転換を招くほどの政治的問題は、民主的なプロセスではなく、内戦やクーデターなど臨界点を超えた暴力的な混乱を通じて解決される場合が多い。

しかし、臨界点を待つだけならば、並の政治家でもできる。逆にいえば、臨界点が来ないうちに、国を大きな転換に導く政治家がいま求められている。打越は「これまでの五十年間、政治家は国民に夢や利益を運んできた。しかし、これからの五十年は辛（つら）いことを国民に求めることになる。自民党でも民主でも、それに対してどれだけ身体を張ることができるかが試される」という。たしかに、現代は高度成長期時代にできてしまった負の遺産をリストラする時代である。描くべきビジョンは必ずしも夢多きものとはならないかもしれない。しかし、それを先頭に立って描き、「伝導」していくのが、松下に叱られ愛を注がれた政治家ではないのだろうか。

（文中敬称略）

ながひさ・としお
一九五八年新潟県生まれ。七七年、慶應義塾大学法学部政治学科入学。一年間大学を休学し世界中を歩き回る。八二年同大学卒業、ＰＨＰ総合研究所入所。八八年、スタンフォード大学にてロシア・東欧学修士号（ＡＭ）取得。九四年、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（ＵＣＬＡ）にて政治学博士号（ＰｈＤ）取得。九七年四月より国家経営研究部長。著書に『ゲーム理論の政治経済学――選挙制度と防衛政策』（ＰＨＰ研究所）『日本の安全保障と憲法』（加藤秀治郎編共著・南窓社）『国際政治学の基礎知識』（加藤秀治郎・渡辺啓貴編共著・芦書房）など。

松下の期待を裏切るな　㊍㊏㊋㊌

二〇〇〇年秋季号で紹介した山崎泰・東京都議会議員が出資法違反の容疑で逮捕された。容疑は、金融ブローカーの依頼で東京都信用保証協会からの融資を斡旋（あっせん）し、見返りに約二百万円の謝礼をもらったとのこと。全容はまだ明らかではない。本人は無罪を主張している。しかし、こうした容疑で逮捕されること自体、「政治や政治家の信頼を回復させるために政治家になった」と語った山崎には、自らの存在理由を否定することにほかならない。

政治家はシャバと刑務所を隔てる塀の上を歩いているようなもの、とよくいわれる。たしかに、有権者が想像する以上に政治にはおカネがかかる。そのためには危ない橋を渡ることもあるだろう。しかし、本文にも出てくるが、それをやってはいけないのである。そうした政治を変えようと願ったのが松下幸之助であり、その願いが政経塾を設立した理由の一つであるからだ。

残念ながら、政経塾出身の政治家が不名誉な事件を起こしたのは、これが初めてではない。こうした事件は、松下の期待を裏切るのみならず、政経塾出身者たちのプライドと信用を著しく傷つけ、さらには、彼らを応援するものたちをも落胆させる。もうこれ以上、決して起こしてはならない。